
サキ様の手

帯刀陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サキ様の手

【Nコード】

N4096R

【作者名】

帯刀陽介

【あらすじ】

ごく普通の高校生が不幸なものを手に入れる前の話。

本屋を出た。私はいきなり不思議な衝動に駆られた。足が勝手に進む。家の方向とは逆に歩いているのだ。そしてやんだはずの雨がいきなり私に降り注ぐ。足が止まる、。骨董屋と書かれた看板の店についた。そしてまた足が動き出して中に入ってしまった。

石は転がり始める（前書き）

川崎 優花は不思議な衝動に駆られて骨董屋と書かれたなぞの店に入ってしまった。さあ彼女を待ち受けているものは、。。。

石は転がり始める

今思いかえしてみればなぜ骨董屋に入ったのか分からないが、一つ言える事がある。

きつと骨董屋には何か私を魅了する物があつたのだろう、、、。それはさておき本題に入る。

私は骨董屋に入った。骨董屋の外見は薄汚く気味が悪いところだと思つたが中は洋風なつくりで意外ときれいだつた。

私がきよるきよるしていたらいきなり

「来たわね」

という声が店の奥からこだまして来た。

不法侵入か何かと間違えられたと思つて私はすぐにこの場から立ち去ろうとしていたとき奥から人がこつちに歩いてきた。

その声の主は女性だつた。いや大人なのだろうか？肌はとてももつやつやしていて10代のようだが顔はとても美しく大人のように見える。服は花柄の着物で現代ではあまり見かけない着物だつた。

女は私に話しかけてきた。

「あなたがこの店に入ったのは必然。偶然ではないわ」

「なぜそう思うのですか？」私は恐る恐る聞き返した。

「人は誰しもかなえない夢があるわ。それをかなえるのがこの店、さあ御覧なさい。あなたの心に引き付けられる物はある？」

女からそういわれた私はじっくり店の中を眺めていた。すると窓際に置いてあるいかにも古そうな黒い箱に私は引き付けられた。

「窓際においてあるあの黒い箱が気になります。」

女は窓際からほこりを被つた黒い箱を持ってきた。

「はいこれですよ」

「あ、ありがとうございます」

私は黒い箱を開けた。

「ピキッ」

その瞬間何か崩れる音がした。気のせいか、。いや気のせいではなかった。私の愚かさが身を滅ぼす音。

箱の中には包帯でぐるぐる巻きにされたミイラの手？が入っていた。ん？まてよ。これはどこかで見たことがあるな。

たしかサキ様の手とかいう名前だったかな、。

「それはサキ様の手。願いをかなえてくれる不思議な手よ。江戸時代に来たアヤカシの手。不思議な魔力が宿っているの。その手指が6本あるでしょ。願いがかなうことに指が折れるわ」

「そっかどっかで見たことがあると思つてたけど祖父の家にあった図鑑の中に書いてあつたやつだ。」

「やつと私は思い出した。」

「それはあなたには勧めないわ。」

「お願いしますどうしても欲しいんです。」いつの間にか私は箱の魔力に魅せられていた。

「あけてもいいわ。でも約束して願いはかなえないと、。」「女は重たそうな顔でそういった。

「ありがとうございます。御代は、」

「もうもらったわ、。」「

なぜお金が要らないのかよく分からなかったが財布の中は空だったのでラッキーだと思つた。

私はサキ様の手を急いでカバンにいれてその場を立ち去ろうとした。そのとき小さな声で女が

「石が転がり始めたわ。」とかすかに言つた気がしたが願いをかなえてくれるものを手に入れて舞い上がつていたので気にせずに出た、。」「

転がる石は止まらない（前書き）

なんでも願いを叶えてくれるサキ様の手を手に入れた川崎 優花
彼女は願いを叶えるのか、、

転がる石は止まらない

雨はやんでいる。さっきの雨がうそみたいだ。そんなことを思いながら家に私は帰っていた。

「ただいまー」家に着いた。私は靴を玄関にはき捨てるようにして急いで2階にある自分の部屋に入りサキ様の手が入った。バッグを床において急いで1階に降り、リビングでいつものようにお父さんが夜買ってきたロールケーキを食べるのであった。母と父は共働きで家には夜遅くにしか帰ってこない、家はひっそりとしていてとても静かだった。ロールケーキを食べながらこれからサキ様の手をどう使っていこうか考えていた。

骨董屋の女との約束を私は平気で破ろうとしていた。約束は例えどんな事情があるうとも守らなければならぬ物である。私は愚かだ、
、、、、、。

子供のようにつきつきしながら使い道を考えていた。まあ私も子供だけど、、。

「うーん願いは何がいいかな。」ふと外を見るとどしゃぶりの雨が降っていた。そこで私は思いついた。

「そうだ今日1日中晴れがいいな」すぐサキ様の手を試したくなったので2階に行ってサキ様の手が入った箱を持ってきて箱に向かって「今日1日晴れにして」そういったときピキツという音がした。

箱の中を見るとサキ様の手の指が1本折れていた。急いで外を見たらさっきの雨はなかったかのようには太陽の光がさしていた。

「本当に願いがかなったんだ」飛び跳ねて私は喜んだ。

すると携帯が鳴った。彼氏からのメールだった。メールの内容は「雨もやんだしデート行かない。」

第2公園で待ってるから。」だった。私は急いでパジャマからおしゃれな服に着替えていた。

骨董屋の女：「あの少女サキ様の手を使ったわね。もう彼女は止ま

らないわ。いい、坂を転がる石は何かにぶつかるとまで止まらないのよ。絶対にね」

気晴らし

外はサキ様の手のおかげでかんかん照り。道を歩くとさつきまで雨傘を歩く人は使っていたが、いまは日傘を差している主婦をたくさん見かける。

さっきの世界から別世界に來たような光景であった。気持ちも高ぶってきた所で第2公園に着いた。すると彼氏が手を振ってきた。

「おーい優花」

彼氏の名前は上崎 龍斗 私には勿体無い位の美少年で「私が言うのもへんだが、」

身長は172cmと結構高く髪はウルフカットとかいうきり方だそうだ、。積極的でいつも明るいのでそんな龍斗を見ているととも和む。その話はさておき、

龍斗：「いやー本当に天気いきなりよくなってびっくりしたよー」

優花：「まあそれは私のおかげだね、。」

龍斗：「それどういう意味？」

私は思わずサキ様の手のことを言ってしまうおうかと思ったけどなんだか言っただけじゃないような気がして結局言わなかった。

龍斗：「ところで今日ゲーセン行かない」

優花「いいよ」

そういうと2人は手をつないでゲーセンまで楽しく雑談しながら言った。

ゲーセンについた。そこはこの辺でもっとも大きいゲームセンターだった。

まず龍斗は1万円札を全部100円に崩した。言っていなかったが龍斗のうちもそこそこの金持ちで財布の中に10万入っているのを見たことがある。

そして最初に龍斗がしたのはクマのプータンの大きい人形だった。

龍斗：「優花のために絶対とるから」

気合十分で始めた一回目あえなく失敗した。2回目、3回目、4回目、、、龍斗は17回もやり直していた。彼女に恥ずかしいところは見せられないと必死にがんばっている。

これでは龍斗の立つ背がないと思った。

しょうがないかまだ5回も願い叶えられるし、、、

優花は思い切って龍斗に見えないようにして

「あのぬいぐるみをとって」

と願った。ピキツ指が折れる音がした。

すると不思議とあんなに下手だった龍斗が1発で取れたのだ。

龍斗：「はいぬいぐるみ」

満面の笑みで微笑みかけてきたのでこちらも苦笑いして返した。

時間は12時をすぎていた。

龍斗：「じゃあマツクでも行こうか」

2人はその後7時まで遊んで私はへとへとになっていた。

私はすぐに寝た。

愚か

今日は学校だ。私は起きて時間が遅かったので急いで支度をして自転車で駅まで行って駅から電車に乗り、そして学校に着いた。これがいつもの私の通学路だ。

学校の校門のところまで後ろから声をかけられた。

「おはよう。優花。」

振り向くと幼稚園からの仲の 立花 薫 だった。

薫：「今日の理科のテストすごく難しい範囲だね。」

ああそうだった。今日は理科のテストだ。昨日龍斗と遊ぶのに夢中でテストのこと忘れてた。

薫：「じゃあ、用があるからもう行くね。」

そういうと薫は走っていつてしまった。私はとろとろ歩いて教室の前まで来たところで先生に出くわした。

先生：「川崎。お前今日のテスト点が悪かったら追試な。」

優花：「ええー本当ですかー？」

先生：「お前最近テストの点も悪いし、まあせいぜい追試にならないようにがんばれよ！」

先生はそういうと私の肩をポンポンとたたいて教室に入ってしまった。

チャイムが鳴ったので急いで私は席に着いた。

そしていよいよテストの時間が来た。

いつもの私ならここで点を落として追試だが、しかし今の私にはサキ様の手がある、、、。

テストが始まる前に私はサキ様の手をもってトイレにいった。

優花：「お願い。私の頭を良くして、。」

そう願うとピキツという音がして指が折れた。

何回聞いてもこの指が折れる音は嫌いだ。なんだか私のすべてを奪い去ってしまいそうな気がするからだ。

そしてテスト開始。いつもの私は自分で言うのもなんだが超がつく

ほどの馬鹿だ。

しかしサキ様の手のおかげで見えるからに解けなさそうな問題でも
すらすら解ける、。不思議だった。

試験をしているどのクラスメイトよりも早く終わった。20分も時
間が余ったので私は寝た。

その2日後、。、答案を返すときがきた。寺島君、。、川崎さ
ん。

優花；「はい」

私は恐る恐る答案をもらいに行くと、先生が満面の笑みで

「よく頑張ったな。」

答案を見ると100点だった。心の中でジャンプして喜んだ。10
0点を取ったのなんて何年ぶりだろうか、小学生以来だ。

学校が終わり私は100点をとったから浮かれ気分で家に帰ってい
た。

そつえば私、何か大切な約束があった気がする。まあいいか。

骨董屋の女；「あの女もう願いを3つも叶えたわね。そろそろ準備
しなきゃいけないわ。」

カウントダウン(前書き)

あと残り3本になったサキ様の手。
この先に待っているものとは？

カウントダウン

学校が終わり家に戻った。帰るとすぐにベッドで寝ようと思った。ただいつまで待っても寝れない。

体はこんなにも重いのになぜか寝れない。何時間経っただろうかもう夜も暗くなっている。

でも寝れない。

なぜだろう？頭の中をなにかが渦を巻いている……。

それは忘れてはいけない何かが関係しているような……気がした。でもいくら待てども思い出せない。

結局その日は眠れずただただ何かをひたすらに思い出そうとした。

次の日

結局何も思い出せなかった。

今日はそういえば体育のテストだ。

別に運動は消しって苦手ではないが、ただ今日のテストがバレーボールだった。

ほとんどではないがまあまあ運動できた私は本当にバレーボールだけができなかった。

自転車で軽快に風をきるのがとても気持ちよかった。

信号を待っていたときにふと軽い気持ちでこんなことを思ってしまった。

「あゝあ今日のテスト受けたくないから体育の先生が死んだりしないかな〜」

冗談半分だった。

でもその軽い気持ちだけであんなことが起こるなんて思わなかった。学校についた。

「おはよ〜」大きな声で挨拶した。でも誰も言葉を返してくれない。

龍斗に「おはよ〜」っていった。

そしたら小さな声で「おはよ〜」と返してきた。

「なんでそんなにみんなテンションが低いの？」って聞いた。

帰ってきたのは「今日体育の副島先生が自殺したらしい。。自殺なんてする人じゃなかったのにな。」

「まさか。。。。。。。。」その瞬間私の頭に恐ろしい考えが思いついた。

「もしかして。。。わたしが先生が死ねばいいって思ったから死んだの。。。。？」

足がフラフラする。そのままトイレに行った。

同様に隠しきれなかった。

涙かこみ上げる。。。。

自分への怒りとそしてサキ様の手への怒りがこみ上げてきた。

そのあとの授業はみんなのテンションも低かったけどそれ以上に私の方がテンションが低かった

授業が終わり家に帰るとき人を殺した罪悪感でいっぱいだった。

そのせいで頭が真っ白になっていたのだろう。。。。

ご飯がなかったから願いを叶えてしまった。

「ご飯出して。。。」

あと1個しか願いが叶えられない。。。。でもそんなこと忘れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4096r/>

サキ様の手

2011年10月8日20時04分発行